

キッシンジャーの出自

RIIA は今も昔も、イギリス王室と完全に結びついているのだ。

(中略)

アメリカにおける RIIA 最大の資産、ヘンリー・キッシンジャーが権力の座に昇りつめるまでの道筋は、イギリス王室の一機関が、アメリカ合衆国に対して勝利する物語だ。

(『新版 300 人委員会 下』 p99)

円卓会議の各情報部長の中でもトップランクで、アメリカでの MI6 の実地活動の責任者、ジョン・ウィーラー・ベネットの個人教授を受けたキッシンジャーは、著書『政治における実践的反抗』で述べているとおり、エリオットの「秘蔵っ子」になった。キッシンジャーは円卓会議の新メンバーに選出され、ハーバード大学国際ゼミナールで研究したマネタリズム政策を推し進めることになった。

キッシンジャーはエリオットの教えを貪欲に吸収し、もはやクレマー将軍がかつて評したような「かわいい、ユダヤ坊やの運転手」の面影はなかった。キッシンジャーはベイリヤル校の精神にどっぷりとつかかり、退廃的なイギリス貴族の熱心な信奉者になった。キッシンジャーがその哲学をとり入れたトインビーは、RIIA で MI6 の主席情報責任者を務めていた。キッシンジャーは同所の文書を使って「学位論文」を書いた。

1960 年代の半ばまでに、キッシンジャーは自分の価値を円卓会議と RIIA、ひいてはイギリス王室に向けて証明してみせた。キッシンジャーは、報奨とそれまでに学んだことのテストを兼ねて、小グループを任せられた。構成メンバーはジェイムズ・シュレンジャー、アレグザンダー・ヘイグ、ダニエル・エルズバーグの 3 人で、円卓会議は彼らを使って一連の実験を試みようとしていた。グループに協力したのは、政策研究所 (IPS) の理論的リーダー、ノーム・チョムスキーだった。

ヘイグもキッシンジャーと同じく、クレマー将軍のもとで働いた。運転手ではなかったが、二人目の弟子のために将軍は、アメリカ国防総省にさまざまな空席を多く見つけてやった。いったんキッシンジャーが国家安全保障会議顧問に就任すると、クレマーはヘイグにその補佐の職を与えた。エルズバーグヘイグ、キッシンジャーは、ついで RIIA のウォーターゲート計画を推進し、300 人委員会の直接の指示に従わなかったニクソンを放逐しようとした。ヘイグがニクソン大統領を洗脳し、混乱させる役割をリードしたそして、そうやって彼が大統領を飼いならしている間、ホワイトハウスを実質上運営していたのがキッシンジャーだった。私が 1984 年に指摘したように、ヘイグは「ディープスロート」と言われたホワイトハウスの仲介人であり、ホワイトハウスで起こっていることの情報「ワシントンポスト」のウッドワードとバーンスタインのチームに流した張本人だった。

(『99 年版 300 人委員会』 p258~259)